

韓国巫俗舞踊のチュムサウイ(舞型)とその事例

慶應義塾大学 野村 伸一

一 概説

巫俗舞踊のチュムサウイ 韓国各地に伝わる巫俗の様態は一様ではない。従って、巫俗舞踊のチュムサウイ(춤사위 舞型)もまた全国一律ではない。チュムサウイということばは一般的には舞の型の特徴をいうときに使う。チュムサウイは口伝で用いられてきたため、諸種の意味がある。すなわち「舞と舞のあいだ」「舞の動作」「舞をなすこと」「舞のようす」などである。また単にサウイということもある。そのばあいは仕組み、足取り 걸음새, 舞のかたち 막음새 などの意味である*1。

ところで、朝鮮半島の巫俗はソウル以北の降神巫のもの、南部の世襲巫のものに大別される。また済州島巫俗はその歴史からうかがえるように独自の巫俗を維持してきた。従って、巫俗舞踊を概観する際、この3類への配慮は不可欠である。なお、これをさらに次のように6種類に分ける見方もある。すなわち京畿道地域、忠清道地域、湖南[忠清南道南部、全羅道]海岸地域、東海岸地域、済州島地域、朝鮮半島北部地域である*2。

降神巫と世襲巫の舞の特徴 降神巫と世襲巫の舞の特徴を概説すれば、次のとおりである。

降神巫は神に接して憑依する。その手順は次のとおりである。

クツのはじめには巫(萬神)は舞わずに、鈴や杖鼓を鳴らしつつ巫歌を唱える。これは神をよび招く段でマンスパジという。次いで、神衣を着る。招請する神ごとに衣服を変える。やがて両手を広げたり腰に当てたりして、左巡りをする。そうして神と一体化すると、上下に跳舞する。こののち、神あそびの舞、雑鬼を追いやる舞をする。そして託言を与える。降神巫は、降神に到るために、打楽器(杖鼓、銅鑼、鉦)あるいは提琴を中心とした速い律動の演奏に合わせて激しく舞う*3。

一方、世襲巫は人と神の間に立って仲介をする。その際、招請する神ごとに衣服を変えない。全羅道では巫をタンゴル(またタンゴッレ)という。タンゴルは巫儀の際、白い服を着る。跳舞はせず、手に取った巫具(鈴、扇、紙銭、[白紙を切って房のようにしたもの])の動きで神の來臨、あるいは雑鬼の追却を表現する。舞は請神舞、娛神舞であり、また人びとの願いを伝える祝願的な舞もある。クツの最後には送神舞をする。楽器は

打楽器の他に、ピリ(小さな縦笛)、横笛、号笛、(ラッパ)などの吹奏楽器、奚琴、伽耶琴、牙箏のような弦楽器で、全般的にゆっくりと進行させる。その舞は儀礼化し、芸術の境地に近づいている*4。

なお、東海岸から釜山にかけての巫は世襲巫ではあるが、神が降りたことを表現するような跳舞をみせることもある(後掲、図版4参照)。また済州島神房の舞では神に接したとき、激しく体を振るわせる。あるいは祖先神を背に受けて激しく旋回する(後述、トラン舞、図版5参照)。

ところで、巫覡の舞にはこうした違いがあるにもかかわらず、全体に共通点があるともいう。すなわち、いずれにしても舞によりシンミョン(신명 霊力を得るための特殊な感覚)が得られるのだろうという*5。これは韓国民俗舞踊論の草分け鄭兩浩がすでに述べたところでもある*6。妥当な見解である。降神巫の舞であれ、世襲巫の舞であれ、よくできたクツは人びとを浮き浮きさせる。それがシンミョンである。ちなみにこのことばは神明に由来するものとみられる。

二 降神巫の舞踊の事例

以下、各地の巫舞の事例を紹介する。なお、学会発表時(2010.12.5)には映像を使用した。ここでは図版を添える。

1. 黄海道の巫舞

治病クツのなかの帝積クツでみられるチュムサウイを取り出すと、次のようになる。万神と樂士でマンスパジ(巫歌の応酬)をしたあと、嚙囉舞をする。不浄をはらったのち、口にハミ(障子紙)をくわえ、拝礼をする。このあとコサン舞(ゆったりとした袖振り舞)をして、坐す。やがて七星剣を携えて舞う(図版1)。ここでは七星神がおりる。帝積も七星も祈願者に寿福を授ける神である。

次に水甕の上に上がり、その姿勢で腕を振り託



(図版1)

宣する。このとき万神は龍王となる。そののち、帝釈花を咲かせた者をよび、対話をし、僧打令を歌う。最後に帝釈餅を人びとに分け与える*7。

事例 (1) 金錦花の帝釈クツ (図版1)

2. ソウルの巫舞

チノギ(死霊祭)のチュムサウイ ソウルの死霊祭チノギ[大規模なものはチノギセナム]について、宋壽男『韓国舞踊史』は次の4種類の舞を指摘した。

①クツのはじめの舞。両腕を横に広げ、左斜め前方に大きく踏み出し、また少し後戻りする。これをくり返しつつ、神の到来を待つ。足踏みだけをくり返す。

②身体を左右に回転させる。このとき、円を描きつつゆっくり回転する、あるいは、その場で素早く回転する。降神直前の舞である。

③降神してすばやく跳舞する。両腕を上下に動かす、あるいは、左右に振る。

④バリ公主[巫覡の祖神。巫歌の主人公]による道場巡り舞。靈魂を極楽に引導する舞で4種類ある。すなわち、ナビ(蝶)道場巡り舞、ハンサム(汗衫)道場巡り舞、プチュエ(扇)道場巡り舞、カル(刀)道場巡り舞である。それぞれ、極楽の門を開く舞、亡者をひたすら引導する舞、極楽に安楽にいけるようにする舞、亡者のハン(怨)を断ち切る舞とされる*8。

事例

(2) パリ公主[に変身した万神]による道場巡り舞 (図版2)

万神は庭に出て、故人の霊と遺族を引き連れ左巡りに回る。これは歩行を中心とする。



(図版2)

- (3) 朴仁伍万神の仏師クツ [帝釈クツ]
- (4) 朴仁伍万神の上帝, 將軍, 神将クツ

三 世襲巫の舞踊の事例

1. 全羅道タンゴッレの舞

珍島シッキムクツのチュムサウイ このチュムサウイは7種類に分類されている。

①パラムマギ(風よけ) 紙銭を両手に持ち両腕を十字型に広げた姿。舞の母型。

②コッポンオリ(つぼみ) 両腕を丸くしつつ上にあげる。花の形をえがく。

③カセジル(挟み込み) 紙銭をX字型に交差させつつ振る。サルプリ(悪気祓え)舞の最も重要な動作。鬼神はハサミを厭うとされる。

④チャウチギ(左右振り) ③に似るが、ここでは両腕を同時に左、右に振る(図版3)。



(図版3)

⑤フェオリパラム(つむじ風) 腕を引き合わせてから返し、回転しながら腕を上にあげる。悪気が取り付かぬようにして、靈魂を極楽に薦度させるための舞。

⑥テグウクムニ(太極もよう) 両腕を首の前で交差させながら太極模様をえがく。

⑦チョオッリギ 両腕または片腕を下から上に跳ね上げる。律動が変わるときに、これを用いる*9。

事例

(5) 金大禮(1935-2011)*10のシッキムクツ

(6) 李完順(1942-95)のシッキムクツ

図版3はシッキムクツの舞の様子をよく伝える。タンゴルは上体を真っ直ぐにし、両手に携えた紙銭を左右、上下などに振る。このかたちで祭場を浄め、霊の道を整える。

2. 東海岸の巫舞

別神クツのチュムサウイ 別神クツは東海岸を代表するクツである。そのチュムサウイは、宋壽男により次の13種類に分類される。

①かもめ舞^{カモメムダン} 両腕を一字型に開き、かもめが揺蕩うように巡る。前後左右に往き来する。この舞はどの段でも舞う。

②トルモリムグァン 片手を上げ、片手を下げつつ巡る。

③アニユチャギ(안유짜기 安らぎ) 一舞したあと、両手を腰の辺りにおき、両膝をいくらか曲げつつ小刻みに動かす。

④ソンシンムグァン(憑依舞) 降神舞の一種。クツの最後には必ずこの舞で終える。両腕を激しく振り、身体を素早く上下させる(図版4)。中部以北の跳舞のように両足を同時に上げない。均衡を保ちつつ片足ずつ上げるのが特徴*11。



(図版4)

⑤メサナムグァン(山型舞) 両腕を左右に一字型に開き、巫具をその上に載せる。山の字の模様に見えることから、このようにいうらしい。

⑥ビビムグァン(低頭舞) 跪き、額が地に届くほど頭を下げる。両腕は頭上に置き、衣の袖を巻いては振りほどく。

⑦サンデムグァン(相見舞) 両人が向き合い、小刻みに身体を動かす。

⑧トゥンマツチュギ(背合わせ舞) 主に男女の巫が背を付けて一巡りする。他地方にはみられない。

⑨タルノムギムグァン(月眺めの舞) 両人向き合い、間に蓮の花あるいは巫具を置く。これをうしろに掲げ、両人は背を合わせて一巡りする。

⑩アンジュムグァン(蹲り舞) 両腕を脇に置き、ゆり動かしながらしゃがみ、また背を向けてしゃがむ。

⑪ノンチュルムグァン(羽ばたき舞) 鳥が羽ばたくようにして前後に歩く。上体を上下に小刻みに動かす。

⑫チャウチギ(左右振り) 腕と足が同時に左右と進んでは振られる。また手首を左右に振る。

⑬オッケマジ(肩合わせ) 兩人、背をもたせる。やがて両肩を順に合わせる*12。

事例

(7) 金映稀^{キムヨンヒ}の世尊^{セソン}クツ

(8) 水甕^{ミヅツツ}クツ

巫は将師をよび降ろす。神霊が降りてくるとき、図版4にみられるように、激しい跳躍がみられる。そののち、将師の力を身に受け、真鍮の水甕^{ミヅツツ}を銜えてみせる。

(9) 念仏 男巫が念仏を唱え、また踊る。これは他地域にはみられない。古代、中世の僧の念仏踊りを継承したものであろう。

四 済州島^{シニョ}神房の舞蹈の事例

済州島はクツの種類が多く、それぞれのクツにおいて独特の舞がみられる。ここでは一例としてヨンドウンクツのチュムサウイをあげる。

ヨンドウンクツのチュムサウイ ヨンドウンクツは旧暦2月、海辺の各地の村で海女が中心となり、その生業が無事なされるようにとの主旨でおこなわれる。宋壽男によると、このときのチュムサウイは次の7種類に分けられる。

①メムドリ(回転舞) 巫具を携え、腕を身体の前で上下に振りながら巡る。また腕を振らずに巡ることもある。

②コルチギとプリム(腕かけと振り払い) 神刀をつかんだ左手を右腕に掛ける。次いで右手を外に向けて振り払う。

③オッケメゴプリム(担いほつき) 神刀を持った左手を上げて肩に掛け、次に左手首を曲げて外に振りほどく。

④シンマジ(迎神) 足を開き、両手に神刀を持つ。これを身体の前で合わせ頭を垂れる。次に右足を左足の上に動かし半歩巡る。足を揃えると同時に、神刀を両横に掲げて降ろす。

⑤グヌン(軍雄)舞 左に回転する際、左手は左肩の上方に上げ、右手は脇下に置く。次に右に回転し、左手を右腕越しに振って載せ、そのあとで右手を後ろ側に振りほどく。両手を引き上げ合掌するように合わせ、下ろしながら拝礼をする。そうして両腕を下げながら横に広げて上げる。このとき、左足を左後方に引く。同時に右足がついてきて方向転換がなされる。この軍雄舞は①の回転舞とともに最もよく用いられる。

⑥モドウムバル トウイムサウイ(足を揃えて跳ぶ舞) 両足を揃えたまま、かかとを上げ、膝と身体全体を小刻みに動かし、左側斜めに跳ぶ。

両手は前に出して立てる。また動きの幅が大きいときは腕を八字型に動かしたりもする。

⑦パルチャ サウイ（八字舞） 両肘を前に出していくらか曲げる。そうして左に円を描くようにし、次に右に移して同じようにする。八字型をえがく舞である^{*13}。

事例

(10) 李貞子のトラン舞

トラン舞は「回り踊り」と訳される^{*14}。神を迎えるとき、神房（巫覡）は激しく回旋をする。萱クツのときなどは、屋外ということもあり、荒々しく回旋する。ここで取り上げたもの（図版5）は1986年10月18日、神クツの二公迎えのなかでおこなわれた「祖先担い入れ」^{*15}の一部である。



（図版5）

トラン舞は、北方系の上下動を特徴とする跳舞と較べると、回旋に主眼があるといえる。太鼓の急迫する調べに合わせて左回り、右回りと回旋をつづけるうちに憑依の状態に近づく。こうした舞は東シナ海周辺の巫舞の原初のかたちであろう。

五 まとめ — 韓国巫俗舞踊におけるチュムサウイの類型

鄭 炳 浩は韓国巫俗舞踊におけるチュムサウイの類型として、次の9種類をあげた。

(1) 回転型 神霊に接するための舞。逐鬼の巫具を携えるときは逐鬼、厄除舞。

(2) 腕輪回型 腕を円、8字、螺旋のかたちに回す動作。巫具を携えての娛神舞、また逐鬼舞、あるいは気分が高揚したときの舞である。

(3) 腕振り回し型 神衣の裾や神刀などを携えての憑神舞、また逐鬼のときの舞。

(4) 腕振り払い型 逐鬼の舞。

(5) 腕揺すり型 娛神または鎮魂、気分高揚の際の舞。

(6) 跳躍型 全羅道と慶尚南道の海岸地域を

除いてほぼ全国的にみられる。神霊がほとばしる、また雑鬼を踏みつけるものという。

(7) あやし型 韓国人の舞踊の基本。肩や腕がおのずと動き出す類いの舞。巫堂も見物人もこうした舞で神を楽しませる。

(8) 腕一字広げ型 腕を広げたまま回転。災厄除け、また神の気を起こす舞という。

(9) 歩行型 ソウル、京畿道では、請神、送神の意味合い。南部のばあいは感情が高まり逐鬼、厄払いの舞となる。

さらに全般的なこととして、北方の巫舞は緊張、緩和の二元的反復、南方のそれは緊張、停止、緩和の三元的な動作に特徴があるという^{*16}。

以上の分類、総括でほぼ網羅されるとおもわれるが、一点、東シナ海周辺地域の巫舞という観点から付け足しておきたい。それは済州島のトラン舞を除くと、激しく巡りつつ憑依に到るという元来の形がこの地域では今日、ほとんどみられないことである。これは歴史のなかで、女巫から男巫（僧や法師<台湾に多い男巫>、道士など）に担い手が変わっていったこととかわるだろう。あるいはその原初のかたちは、中国地方劇に類出する大活劇のなかに痕跡をとどめているといえるのかもしれない。福建や広東東部の祭祀演劇の現状をみると、多くの人びとは筋立てよりも、その激しい音楽と動きそのものを好んでいるようにみえる。

*1 鄭 炳 浩『韓国俗』、悦詩堂、1985年、17頁。

*2 宋壽男『韓国舞踊史』、금관、168頁参照。

*3 李炳玉「韓国巫俗에 나타난 北方系와 南方系 춤 特徵의 人類學的考察」『大韓舞踊學會論文集』第30号、大韓舞踊學會2001年、63頁以下。

*4 同上、63-65頁参照。

*5 同上、65頁参照。

*6 鄭炳浩ほか『巫舞』無形文化財調査報告書(8)、文化財管理局文化財研究所、1987年、42頁。

*7 前引、宋壽男『韓国舞踊史』、205-206頁参照。

*8 前引、宋壽男『韓国舞踊史』、174-175頁。

*9 前引、宋壽男『韓国舞踊史』、185-187頁。

*10 重要無形文化財第72号「珍島シッキムクツ」の唱分野技能保有者（人間文化財。1980-2011）。

*11 一般的にはこのようにいえるが、図版4でみられるように、両足を揃えて激しく跳舞するばあもある。

*12 前引、宋壽男『韓国舞踊史』、192-193頁。

*13 前引、宋壽男『韓国舞踊史』、198-200頁。

*14 玄容駿『済州島巫俗の研究』、第一書房、1985年、350頁。

*15 神クツの次第については、野村伸一「神クツの全日程」鈴木正崇・野村伸一編『仮面と巫俗の研究』、第一書房、1999年、328-336頁を参照のこと。

*16 前引、鄭炳浩ほか『巫舞』無形文化財調査報告書(8)、280-283頁。